

# 主日礼拝説教

2017.4.16

## 『名前を呼ばれる主』

復活祭

ヨハネの福音書 20章1~18節

和泉聖書教会

牧師 五十嵐 賢志

## 新約聖書 ヨハネの福音書 20章1~18節

さて、週の初めの日に、マグダラのマリヤは、朝早くまだ暗いうちに墓に来た。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。それで、走って、シモン・ペテロと、イエスが愛された、もうひとりの弟子とのところに来て、言った。

「だれかが墓から主を取って行きました。主をどこに置いたのか、私たちにはわかりません。」

そこでペテロともうひとりの弟子は外に出て来て、墓のほうへ行った。ふたりはいっしょに走ったが、もうひとりの弟子がペテロよりも速かったので、先に墓に着いた。そして、からだをかがめてのぞき込み、亜麻布が置いてあるのを見たが、中に入らなかった。シモン・ペテロも彼に続いて来て、墓に入り、亜麻布が置いてあって、イエスの頭に巻かれていた布切れは、亜麻布といっしょにはなく、離れた所に巻かれたままになっているのを見た。そのとき、先に墓に着いたもうひとりの弟子も入って来た。そして、見て、信じた。彼らは、イエスが死人の中からよみがえらなければならないという聖書を、まだ理解していなかったのである。それで、弟子たちはまた自分のところに帰って行った。

しかし、マリヤは外で墓のところにたたずんで泣いていた。そして、泣きながら、からだをかがめて墓の中をのぞき込んだ。すると、ふたりの御使いが、イエスのからだが置かれていた場所に、ひとり頭のところに、ひとりは足のところに、白い衣をまとってすわっているのが見えた。彼らは彼女に言った。

「なぜ泣いているのですか。」

彼女は言った。

「だれかが私の主を取って行きました。どこに置いたのか、私には

わからないのです。」

彼女はこう言ってから、うしろを振り向いた。すると、イエスが立っておられるのを見た。しかし、彼女にはイエスであることがわからなかった。イエスは彼女に言われた。

「なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか。」

彼女は、それを園の管理人だと思って言った。

「あなたが、あの方を運んだのでしたら、どこに置いたのか言ってください。そうすれば私が引き取ります。」

イエスは彼女に言われた。

「マリヤ。」

彼女は振り向いて、ヘブル語で、

「ラボニ（すなわち、先生）」とイエスに言った。イエスは彼女に言われた。

「わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないからです。わたしの兄弟たちのところに行って、彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る』と告げなさい。」

マグダラのマリヤは、行って、

「私は主にお目にかかりました」

と言い、また、主が彼女にこれらのことを話されたことを弟子たちに告げた。

## 梗 概

### 序

- I. なぜわからないのか？
- II. 名を呼ぶということ
- III. 天を仰いで

### 結

## 序

先日、息子の高校の入学式に行ってまいりました。

基督教独立学園高等学校という、山形県の小国町のさらに山に入った「日本一小さな高校」と呼ばれる学校です。25名の定員で、今年定員が割れて21名の男女が入学しました。

入学式で、校長が一人ひとりの名前を呼びました。どの学校でもそうでしょう。しかし、この学校では、校長が名簿を見ず、人数が少ないということもありますが、一人ひとりの顔と名前をすでに覚えていて、心から語りかけるように名前を呼び、

「あなた方の入学を許可します」

と宣言したのです。

名前を呼ばれて、彼らの歩みが始まったのです。

## 1. なぜわからないのか？

きょう、この復活祭——イースター——の礼拝で読まれた箇所が登場するのは「マグダラのマリヤ」という名の女性です。

彼女は、事の起こりの一部始終を目撃した人としてここに描かれています。十字架の上でまだ息をしておられる主イエスのお姿を見、声を耳にし、この方が息を引き取られる瞬間にそこに居合わせました。そして十字架から遺体を取り降ろされ、墓に納められるのに立ち合いました。

イエスの死と埋葬の目撃者であり当事者であったマリヤ。その彼女が空っぽの墓に遭遇したのです。朝早くまだ暗いうちに墓に来てそこで目にしたのは、墓から石が取りのけてあったということです。これに驚いたマリヤは、ペテロたちのもとに知らせに向かいます。そしてこう言いました。

「だれかが墓から主を取って行きました。主をどこに置いたのか、私たちにはわかりません」

ペテロと「イエスが愛されたもうひとりの弟子」がそれを聞いて急いで墓に向かいます。その光景を記したものが随分と細かい描写がされています。ペテロよりもうひとりの方が足が速かったので先に着いたとか、見たけれど何か入らなかったとか。ペテロは少し遅れたものの墓の中まで入ってじっくりと見たようです。イエスの頭に巻かれていた布とからだに巻かれた亜麻布は別の場所にあったと言います。しかも、頭のほうの布切れは、巻かれたままだったとありますから、すっぽりと抜けていたということです。

「イエスが愛されたもうひとりの弟子」とは、この福音書を記したヨハネ自身であろうと言われています。彼はこう書いています。

「そのとき、先に墓に着いたもうひとりの弟子も入って来た。そして、見て、信じた。彼らは、イエスが死人の中からよみがえらなければならないという聖書を、まだ理解していなかったのである。」

この「信じた」というのが、一体何をどの程度信じたのかということが今ひとつ明らかではありません。彼らはイエスの復活を示した聖書のことばを理解していなかったとありますから、先に墓の中に入ったペテロの言った亜麻布や布きれが不自然に残されているということ、確かにその通りであると信じた、理解できます。しかし、みことばを理解していなかった「彼ら」とは、ペテロとマリヤのふたりであって、「イエスが愛されたもうひとりの弟子」は、実はこの時点で復活を信じたのだ、という理解もあります。いずれにしても、いずれかの時点、時の前後や状況は異なるけれども、それぞれが復活のイエスを信じる転機となる時を持ったということです。

マリヤはどうだったのでしょうか。こういう不自然な状況をつぶさに見ても、「だれかが墓から主を取って行った」という認識は変わっていないようです。

けれども、もし彼女の言うようにだれかがイエスの亡骸を移動したのであれば、なぜ頭に巻いた布切れと亜麻布が残されていたのでしょうか。頭は巻かれたままですから、例えば頭頂部からあご、そして首まで巻かれた布をすっぱり抜き取ることは出来ないでしょう。とおりぬけたような状態だと言わざるを得ません。かと思えば、からだの方は包帯がほどかれたようなのだとするとどういったらこういう現象が起こるのか、さっぱりわかりません。

この不自然さについて辻褃の合う説明はできないものの、亡骸を移動するためにわざわざ布を解く必要はないのはわかります。

私たちはイエスの復活を知った上でこのところを読んでいますか

ら、不思議ではあるものの起こりえると納得するでしょう。しかし、マリヤは、誰かが盗んで行ったとは思えない証拠を見ながらも、

「だれかが主を取って行った」

という考えを変えることが出来ないでいるのです。

マリヤは、あきらめきれずに空っぽのその墓の前にたたずんで泣いていました。そうしてもう一度泣きながら、からだをかがめて墓の中をのぞき込んでみると、今度は「ふたりの御使いが、イエスのからだがかかれていた場所に、ひとりは頭のところに、ひとりは足のところに、白い衣をまとってすわっているのが見えた」のです。誰かが墓の中に入っていったのを見たわけでもないのにだれかがいる。しかも、ひとりは頭のところに、もうひとりは足のところにいたわけですから、あの布切れと亜麻布の不自然さにさらに不思議な存在を加えていたということになるのです。

彼らはこう話しかけます。

「なぜ泣いているのですか」

マリヤは答えます。

「だれかが私の主を取って行きました。どこに置いたのか、私にはわからないのです」

今度は、よみがえられたイエスご自身がマリヤの後ろに立って、御使いが尋ねたことばをもう一度尋ねます。

「なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか。」

マリヤはこのことばをかけられる前にうしろを振り向いてそこに立っておられるイエスを見えています。それでも気づかない。

これらはいったい何をあらわしているのでしょうか。

だれかが遺体を取って行ったのではない、というヒントをいくら見せても、イエスの復活を理解するには至らないということです。

ヨハネは「イエスが死人の中からよみがえらなければならないという聖書を、まだ理解していなかった」と記しています。聖書がそれを示しているというだけではなく、イエスご自身が弟子たちに再三語ってこられたことでもあります。直接であれ或いは間接的であれ、マリヤはそれを聞いてきたはずです。イエスの亡骸を巡ってこれだけ不自然な状況を目の前にしているのですが、それだけではイエスがよみがえられたということに決して結びつかなかったのです。

## II. 名を呼ぶということ

御使いの問いかけでもわからない。そしてイエス自らがマリヤに声をかけ

「なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか」

と問うたのです。聞き馴染んだイエスの声ですらマリヤはそれがイエスだとわからないのです。私たちは、マリヤがなかなか信じられないでいることにもどかしさやじれったさを感じるでしょう。彼女はイエスの姿を見て、ことばを交わしているのにイエスだとわからない。なぜわからないのでしょうか。ここでマリヤという人の問題性、罪深さや心の鈍さを責めないでいただきたい。むしろ、どの時点でイエスのよみがえりがわかったのか、それを明確に示すためにこの出来事はあるのです。

彼女がイエスだとわかったのは、

「マリヤ」

と呼ばれた瞬間でした。

名を呼ばれた。その時にわかったのです。単に「声」ではなく「名



まえ」でした。

ヨハネは、先に、この福音書の中程でイエスのことばをこう記しています。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。羊の囲いに門からはいらないうで、ほかの所を乗り越えて来る者は、盗人で強盗です。しかし、門からはいる者は、その羊の牧者です。門番は彼のために開き、羊はその声を聞き分けます。彼は自分の羊をその名で呼んで連れ出します。彼は、自分の羊をみな引き出すと、その先頭に立って行きます。すると羊は、彼の声を知っているのうで、彼について行きます。」

名まえは、私が私であるというしるしです。その名をキリストに呼んでいただいてはじめて自分が何者なのかがわかる。この私が主に呼ばれた。実にここから信仰の歩みが始まると言って過言ではありません。マリヤは、名まえを呼ばれたときにイエスだと気づきました。と、同時に、自分がこのイエス・キリストのものだとわかったのです。復活の主に出会うとはこういうことであつたのです。

ハイデルベルク信仰問答の問1にこうあります。

生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。

私が私自身のものではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、私の真実な救い主イエス・キリストのものであることです。

(ハイデルベルク信仰問答 問1)

「イエス・キリストのものであること」が「ただ一つの慰め」です。ここにある「慰める」ということばは、ギリシヤ語では「パラカレオー」ということばです。「パラ」は英語の「parallel (パラレル)」

の語源で、同じ方向に向いて並んでいることを言います。「カレオー」から英語の「call (コール)」ということばが生まれましたから、呼ぶことです。面と向かって「来い」と言うのではなく、傍らにです。神を仰ぐという同じ方向に向いて、いやそちらに目を向けるべく、復活の主が私の傍らに来られたということではないでしょうか。このようにして主は私を慰め、信じて歩むべく励ましておられるのです。

### Ⅲ. 天を仰いで

復活の主と出会った者たちにとって、よみがえられたイエスがどのようなお方なのか、私たちは正しく認識しなければなりません。

イエスに名を呼ばれたマリヤは、  
「ラボニ (すなわち、先生)」  
と言いました。

あのトマスが主と出会ったときは、  
「私の主。私の神」(ヨハネ 20:28)

と言いましたから、それに比べ「先生」というのは、主が復活されたことを受け止め切れていなかったことの表れだ、と解釈する向きもあります。

しかし、だからといってマリヤがこの時イエスを神よりも低く見たということでもないような気がします。マリヤは、普段から主イエスをそう呼んでいたのでしょうか。だから、わかった瞬間思わず、

「ラボニ」

と呼んだのだと思います。

ただ、マリヤが復活されたイエスに何を期待したのかということが

問題です。彼女は、生き返ったイエスとともに、今までのように、これからもずっといっしょにいられるということを願ったのではないでしょう。

それを表しているのが、

「わたしにしがみついてはいけません」(17節)

と言われた主のことばです。彼女は「先生!」と言ってイエスにしがみついたのです。おそらく放そうとしないほどにしがみついたのだと思われます。

「わたしにしがみついてはいけません」

というイエスのことばは、

「しがみついてはいけません」

ではありません。すなわち、しがみつこうとしたのを制止したのではないのです。しがみついたままでいてはいけない、という意味でしょう。

マリヤは、イエスの亡骸ではなくて、生きているイエスを取り戻しました。しかし、彼女には依然として変わっていない部分があり、それは変えられなくてはなりません。

主イエスは、

「わたしはまだ父のもとに上っていない…『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る。』と告げなさい」

と言われました。

これまでと同じようにいつまでも地上に留まっているのではない、復活は十字架の前に戻ることでない、そう主イエスはマリヤに教えられたのです。

会堂管理者の娘が「タリタ・クミ」と言って生き返らされたのとも、

ラザロがよみがえらされたのとも違います。彼らは、病が癒されるといふ延長線上において、やがては死ぬからだに蘇生したのであって、キリストの復活とは違います。

イエスは、もはや死ぬことのないからだでよみがえり、天の御国で永遠に生きる肉体をもって神の右の座に着かれたのです。このイエスの復活についての正しい認識は、この世の終末に向けての私たちキリスト者の生き方を示すものとなります。

私たちは使徒信条で、

「三日目に死人のうちからよみがえり、天にのぼられました。そして全能の父である神の右に座しておられます。そこからこられて生きている者と死んでいる者とをさばかれます。」

と、こう告白いたします。

復活の主を地上に留め「しがみつく」のではない、天にのぼり神の右に座し、そこから来られる主を仰ぐのです。

彼女は復活の主に出会って本当に変えられました。彼女は弟子たちのもとに行って、

「私は主にお目にかかりました」

と告げたのです。

キリストの死と復活の証人として遣わされていったのです。

## 結

私たちの信仰の根幹は、復活のキリストと出会うことです。

一生懸命探し求めてやっと出会えた、と思うかもしれませんが。けれども、私たちの主との出会いは、呼ばれたことに始まったのです。

私たちの主は天地創造の神です。始めの時からこのかた、どれだけのいのちが生み出されてきたのでしょうか。人のいのちに限りてみただけでも数え切れないほどです。今この瞬間でも地球上に何十億という人が生きているわけです。その中で、

「この私が呼ばれた」

ということは奇跡以外の何ものでもないのです。私という存在を知り、心に留め、選び、召してくださったのです。

あらためて呼んでくださった主の声に導かれて共に歩んでまいりたいと願います。